

正宗白鳥

谷崎潤一郎と

佐藤春夫

谷崎潤一郎と佐藤春夫

一

いい意味か悪い意味かで多少文壇の批評に上っているらしいのに読書慾を刺戟されて、私は、「武蔵野少女」という新刊の長篇小説を通読した。佐藤春夫君の最近の創作である。

これは時事新報に連載されたものだが、新聞社を喜ばせた小説ではあるまい。一回毎に多数の読者の興味を惹

く性質のものではない。藤村・花袋・秋聲・漱石などの長篇は多く新聞に発表され、文学史上に残るようなそれ等の傑作が新聞紙を発表機関とすることも、さして不似合には思われなかつたが、それは一昔も一昔も前の事で、今日の新聞はそれ等の長篇物を甘んじて連載する舞台ではなくなっている。新聞小説という別種の文学が要求されているので、その方で巾を利かせようと思えば、それに適応する態度を取らなければならぬので、徒らに俗悪呼ばわりして新聞社の小説選択態度を非難するのは、迂愚な沙汰である。新聞社や劇場が、読者受けのしないも

のや見物受けのしないものを、たといそれが芸術的逸品であつたにしても、採用しないのは当然過ぎるほど当然なこと、物質上の損失の大嫌いな我々人間が、大切なお得意である読者や見物の御機嫌にかなわないものを取り上げる訳はないのだ。

それで、新聞という舞台が作家の金と名を得るための最大重要な場所であると極まると、それに反抗するものがあるとなかろうと、それに適応するような作風が流行するのは、大きく云えば宇宙自然の理法なので、水の低きにつくが如くである。適応しない作家は落伍する外

はないので、自然淘汰の天則はここにも行われるにちがいない。私は、菊池寛君や山本有三君の新聞小説は、出来不出来はとに角、その舞台に適應するように企てられていると思う。はじめから通俗作家を志して文壇に出たとは思わない二氏も、素質がそれに適していたのか、時世を見る明があつたのか、新聞小説読者の好みに投ずる用意は有っている。

「武蔵野少女」には、その用意が乏しい。佐藤君も、新聞小説を可成り沢山書いているらしいから、中には新聞小説作法にかなつた傑作があるのかも知れないが、少く

もこの小説は新聞向きでないと思われる。……しかし、私は、新聞社の文芸面擔任者ではないし、新聞社の株主ではなし、こういう小説のために読者が殖えようと減ろうと、自分に取って何の損得もないので、純粹の文学愛好者としてこの小説を読み、何の拘束のない自由批評家として、批評を試みようとするのである。一卷に纏ったものを一日がかりで読切ったのだから、一回々々の小細工をした興味に釣られもしなかった。読んでいるうち、おりおり退屈した。物足らぬ思いをした。だが、作家が人間を描こうとする真面目な態度を持し、面白づくで

空々しい筋立をつくらうとしているところのないのが、私には気持がいいので、兎に角結末まで見ることにした。この頃幾つかの長篇小説に対して、読みかけて途中で巻を投じたような侮蔑をこの小説には加えなかった。読後、少なくともこの作品を対象としてわが文学を論じ人生を語ってもいいように思ったのである。

私は短篇ばかり書いているのでよく分らないが、長篇小説を筆にたるみなく書き上げるのは容易な仕事ではないであろう。「武蔵野少女」は、以前の佐藤君の特色であった主観的な抒情味の豊かなものではない。広い世界

を素材として、いろいろな人間を描写し、いろいろな人情を叙したもので、「田園の憂鬱」の作者の小説道も進歩発展し、大いに老熟したように思われたが、それともにも全体から受ける印象が稀薄なようにも思われた。私はちよつと齒痒いような感じもした。可憐な少女が物質には恵まれなくても、温かい愛情に包まれて、成育して、悲劇を身に背負わないで結婚生活に入るのは、読者も安心して一卷を読終れる所以で、筆づかいの刺々しくないのが、その作者の特色なのであろうが、しかし、人間の扱い方が常識的などころに停滞していると思われな

はなかつた。この小説を読んで、私が思い出したのは、この作者の出世作である「田園の憂鬱」と「都会の憂鬱」とであった。「武蔵野少女」の育ての親の家庭である東京近郊の生活者伏見一家の人生は田園の憂鬱の再現であり、生みの親である貧しき東京生活者藤木一家の人生は都会の憂鬱の再現であると云えないことはない。新作長篇の材料は友人から提供され、友人の体験も取入れられていると、作者自身も云っているが、しかし、この作品に芸術的生命の与えられたのは、作者が十数年前に心にはぐくんだ田園都会の両憂鬱の力であると私は感じた。

爾來十數年の人生經驗が作者佐藤春夫の小説を成育させ、いろいろな美しい花を咲かせ実を結ばせたのに違くないが、かの初期の二篇に於て作者の芸術の基調は極つているのである。そう思つて私は、嘗つて速讀したことのあつたかの二篇を新たに讀返したが、二つとも面白かつた。この頃雑誌でおりおり見る佐藤君の作品よりも面白かつた。ヘルンが日本の學生に教えている如く、二度三度繰返して讀んでも価値の薄れない作品が、本当の傑出した芸術であると云つていいので、かの二篇は数多き大正期の小説中で注目に価いするものなのだ。私は元來佐

藤君などとは、文学芸術に対し嗜好を異にしているらしく、その作品も、平生あまり読んではいないのだが、今度かの旧作二篇を清新な芸術に接した気持で通読した。「田園の憂鬱」は、私も田舎生活をしているので、自分が日常見聞していることと感じていることが、この作者によってよく書かれているのに興味を覚えた。明治時代にも、こういう田園生活を書いた小説はあったが、多くは粗笨で、且つ型に捉われていて生気がなかった。獨歩にも、武蔵野生活者を題材とした短篇が幾つかあるが、自然の描写は清新であつても、人間の現実は書けていないで、

今読むと稚拙の感じがする。今ヘルンの名を出したので
思い出したが、ヘルンの日本田園讚美の感想は要するに
異国人の夢であつて、真相を穿つてはいない。そこに彼
れがロマンチストで夢幻趣味の芸術家であつた面白さが
あり、明治以来のロマンチズムの作品は、日本の作家
のうちから傑れたものを求むること難くして、ヘルンの
如き外国人の作品か、或いは森鷗外などの創作的翻訳に
これを求めなければならぬことになるのだ。それにつけ
ても、ヘルンの西洋文学評論に心酔することも警戒しな
ければならなかつたのだ。ヘルンは自己の趣味に惑溺す

る人であった。

「田園の憂鬱」には、断片的ではあるが、憂鬱な青年の目に映った田舎の光景が印象深く描かれている。田舎の老若男女の面目が一瞥的にでもヴィヴィッドに現われている。それに比べると、「武蔵野少女」は細叙されているに關わらず、それから与えられる印象が稀薄だ。伏見の爺さんはまだいい。婆さんや少年の豊作は甚だ平凡だ。こういう人間の性格描写になると、時代おくれと云われていても、自然主義時代の秋聲・泡鳴・藤村等の諸氏の作品の方に断乎として傑れたところがあると、私は考え

た。爺さんは人がよくって、婆さんは里子のお徳を可愛がりながらも打算的などころがあると、媪翁両者の性格別をするのも、「舌切雀」以来の芸套である。無論作者が爺さんをそういう人物として描き、婆さんをそういう人物として描くのも結構だが、それなら、もっと心理と行動に突込んだところがなければならぬ。婆さんにおりおり邪推を廻させたり慾の深そうなことを云わせるのも、取ってつけたようである。それに比べると、「都会の憂鬱」のなかの、妻君の母親の方は何でもないうような対話の間に、その心理状態が躍如としている。

「都会の憂鬱」は「田園の憂鬱」以上に面白い。文学志望の青年がまだ志を遂げざる間のさまざまな悩みを書いた小説は多い。名を成した後に無名時代不遇時代を回顧して一篇の小説に作り上げるのは、作家として快心の事で、そこは、筆の立つ有難さで、政治家や実業家や軍人や俳優などの過去の追憶談、立身の物語とは違って、自由により、思う存分に自己を發揮し得られるのである。しかし、百人の文学志望者のうち、こういう快心な題材を取扱ひ得られる幸運児は、一人か二人あるかないかと云つていいくらいで、大抵は、父母兄弟知人に侮蔑され、貧

乏に苦しめられ、自己の才能の有無についての疑惑に悩まされたきりで、局面轉換の幸福は味う由もない者が多い。

「都会の憂鬱」は、憂鬱な青年期を脱した後に書かれたものらしいが、他の或種の文壇成功者の回顧小説に見られるように、「幸福の地位に立って不遇なりし昔を思い出すほど喜ばしきことはなし」と云った得意な調子は見られない。青年期の憂鬱がそのままに現わされている。しかし、自然主義時代の憂鬱小説のように薄汚なくはない。プロ派の描く貧乏小説のように理窟っぽくも薄汚な

くもない。芸術味横溢して、ユーモラスで、憂鬱のうちに一抹ののどかさがある。この小説の中に、女優である妻君が、「女というものは、時にははつきりと命令をして貰いたいものなのです」と、夫に要求しているが、それが「武蔵野少女」の少女お徳が、自分の身の処置に迷う時に、兄に要求する言葉になっている。かの新劇女優が、「何かの台詞にでもあるのを応用したらしい」その言葉が、少女お徳の心の動揺を作者が描写するに当って役に立っているのである。この新長篇中の犬や猫の描写も、「憂鬱篇」中の小動物愛撫の延長で、一匹の子猫を

作中に取入れたことが、田舎家の生活描写を余程豊かにさせているのによつても、作家たるものは日常の自己の経験や雑多な知識をおろそかにしてはならないことが察せられる。伏見の爺さんが子猫の餌食にするために寒鮎釣りに出掛けて道に迷つて、知らない男から魚を貰つて帰る話なんか、こういう挿話には、他の長篇作家に見られない佐藤君独特の妙味がある。「春風馬堤凶譜」の描かれる所以である。

作中の重要な人物である藤木は、都会の憂鬱を感じている男であるが、それが、旧作「憂鬱篇」の主人公やそ

のお仲間の江森渚山などと同類の人物らしく、失敗した事業家としての面目が現われていない。植民地浪人の如きはどれも描き足りない。なかなか細かに書かれているのだが、印象が手薄である。どの男も女も稍々ややお人よしに過ぎるように受取られた。藤木夫妻にしても、夫の方から云うと、妻が夫に対して無理解であり、人生に対して不徹底ということ。妻の方から云うと、夫が我儘で得手勝手ということ。つまり、あらゆる夫婦喧嘩の言い分の公式見たようなことを根拠として衝突をするのだが、二人の衝突が、日常の烈しい生活苦に責められていなが

ら、真剣のように思われたい。二人の実子を里子に出したり、先夫の子を背負ったりしている藤木夫婦の間には、もつと息苦しい葛藤がありそうに思われるのに、そういう所は抄略されている。この夫婦もお人よしに過ぎるように受取れた。だが、こういう風にのんびりしていると、ころに、この作者の小説価値が認められないこともない。私は永井・谷崎・里見諸氏の作品に親しんでいるほどには佐藤君の作品に親しんでいない。そう沢山は読んでいないのだ。それで、私の読まないものにどういふ傑作があるか知らないが、今度偶然最近作の「武蔵野少女」

を通読し、併せて、旧作田園と都会の憂鬱篇を復読して、この作者も永井・谷崎氏等も同様、生れながらの芸術家であると感じるとともに、この作者はどうして、こう浮世を甘く見るのだろうか、多少意外に感じた。作者は、自己の趣味に照らして、田舎人の醜陋に眉をひそめている。いろいろな人間の奸策や邪念をも見のがしてはいない。だが、それ等は上っ面のことで、水に流れる塵芥や泡沫見たいなものだと云ったような態度で取扱って、常識的な見方で安んじているように思われる。人生の底を流れる滔々たる濁流に目を注ごうともしないように思わ

れる。明治以来の日本文学はどの方面でもお手軽であつて、ロマンチストの夢も浅いのだが、佐藤君の作品にしても、浅いと云うのが語弊があるとすると淡いのだ。日本では伝統的に淡いもの小さなものに愛着を寄せる傾向があるのだが、明治文壇のロマンチストの代表者高山樗牛でさえ、「天下凡そ物の小さきを好むこと、我が国民の如きは無かるべし。彫刻は根附にあらざれば置物なり。画幅は扁額に非ざれば掛物なり、八州の山河を前にして人は盆栽に苦心す。文壇に歓迎せらるるものは、十七字の俳句にあらざれば、百行以内の短編小説……」と、慨

歎している。形の大小は、どちらでもいいと私は思うが、小にして浅くては物足りない。私はロマンチストたるバイロンの烈しさを好む。人間に対する憎悪から、神の掟に対する疑惑と反抗の烈しさにまで達しているのを好む。熱血とか血涙とか云うと、維新の豪傑の持ち物のように思われるが、バイロンのように芸術と飽和した血涙は我々の心をも動かす魅力を有っているのである。

佐藤君は、ある作品の跋文に於て、「作者はだんだん年とともに、ロマンの色彩を失いつつある。」と云って、その埋合せに「何ものかが別に加わるかも知れぬ」と期

待している。「何ものか」とは、現実的知識か何かであろうが、私などは、「武蔵野少女」が生半可な写実的なものにならないで、ロマンの色彩の濃厚なものになっていたら、もっと面白かったであろうと思っている。時世の止むを得ざるところであるが、日本では詩人にして小説家に転じるものが少なくなかった。英国のハーディは、文学に志した初めには詩を作っていたのだが、当時の英国文壇は小説の全盛期で、詩を売ったのでは豊かな生活が出来そうになかったので、詩を止めて小説を作ることにした。そして小説作家として大成した晩年に、年少時

代の志を継いで作詩を樂むようになった。日本でも詩人としては生活費が得難く、また小説家ほどに世間的名聲が得難かったために転業者があつたのである。だが、日本の読者が詩を好まないのではない。古來和歌や俳諧の流布していた我国の読者は他国人よりも一層詩を好んでいる筈なのだ。それで、小説にしても詩を取入れたもの、詩の味わいを加味したものが喜ばれるので、詩人的素質を有つた小説作家の作品が、却つて小説的素質を有つた小説作家の作品よりも、多数に迎えられたりするのである。佐藤君の如きは、豊かな詩人的素質を有つた作家で

あるから、その素質を大切に、縦横に自己の特色を
發揮すべきである。

私などでも、「さんま」の唄や「殉情詩集」の詩の或
ものを愛誦している。嘗て瀧田樗陰君が私に向つて、「佐
藤春夫という人は、小説を書きながら涙をぼろぼろ落し
ていますよ」と、今見て来たことを感動して話したこと
があつた。欠^{あくび}伸しながら筆を執つた経験にのみ富んでい
る私には、そういう作家の気持は分らなかつたが、笑
事とは思えなかつた。畔柳芥舟氏（？）の話として、誰
れかから間接に聞いたと記憶しているが、「高山樗牛が

田山花袋という男は不思議な男だと云っていたよ。一しよに箱根か何処かへ遊びに行つた時に、花袋は山の眺めの美しさに、感激して涙を流したそうだ」という意味の話であつた。

これ等二つの逸話を今思い出して、私は二つとも面白いと思つている。花袋氏も、本当は、平面描写とか現実暴露とかに捉われず、ゴンクールやフローベルなどの冷徹主義の作家にかぶれず、持前の詩人的素質を發揮して小説道に進んで行つた方が、却つて自己の大を成すためによかつたのではなかつたかと疑われる。

二

「武蔵野少女」は小説として充実してはいないが、作者が広い世界へ足を踏み出して、あたりを見渡しているような感じはした。長篇小説の通俗化した今日、この新作にはまだしも芸術味が豊かであるとして注目していいのである。佐藤君はこれからどういう風に進んで行くか知らないが、氏が昔から持っていた奇談怪説趣味よりも、田園都会の憂鬱系統の方面で、氏が大成することを私は

望んでいる。佐藤君が十数年の間に変化し発展し、或いは同じことを繰返していることを考えるにつけ、私は、谷崎、志賀、里見、武者小路諸氏——概して明治文学を受継いで、それぞれの特色ある新文学を産出した大正時代の才人の文学過程について考えた。明治から大正に移ると日本の国運の進歩とともに、文学も進歩していることは認めなければならぬ。経済的にも、大正時代は前代よりも遥かに恵まれていたのだから、絢爛たる芸術の華が開いたのも当然なので、この時代に活躍した人々に比べると、貧乏しながら文壇の地ならしをした明治の文

学者は余程割が悪かったのだ。

牡丹の花のような絢爛な色彩を有った芸術家は、古来日本には乏しいので、明治以来では、紅葉山人でなし、泉鏡花でなし、里見弴でもなし、佐藤春夫でもなし、やはり、谷崎潤一郎である。枯淡とか簡素とか哀愁とか瀟洒とか気品とかの味を有った作家は多いが、絢爛の美を有った作家は少い。絵画の方では鑑賞者の目を眩惑させる豊麗なものがあるではないかと云うかも知れないが、あれは絵具の力でごてごてしたケバケバした色を出しているだけなのだ。日本の文学は日本の絵具とは違つ

て、絢爛豊麗な感じを、外形だけでも現わすに適しないように思われる。

谷崎君は、新作家として類稀れな派手な色彩を發揮したために、異常に歓迎されたが、ああいうものは早く凋落するだろうと、我々には思われていた。氏には、はじめからロマンチックな幻想を喜び、怪奇な探偵的事件を悦うれしがる傾向があつて、この点佐藤君と趣味を同じゆうしていたらしく、「李太白」や「指紋」のような佐藤君初期の作品を称讚して、雑誌へ紹介の労を取ったりしたのは、永井君が谷崎君の作品を引立てたのと揆を一にし

ているのである。ローマンスらしいローマンスの乏しい新日本の文壇では、「李太白」や「指紋」も珍らしいものにはちがいないが、しかし、佐藤君の幻想や怪異趣味の方面の作品は大したものではないと私には思われていゝる。佐藤・谷崎両氏の文学的素質の甚だ異なっていることは、前述の私の批評によつても察せられる訳である。両者とも芸術派でありロマンチストであると云われなことはないが、そう云えば、小川未明君だつてロマンチストである。

派手なものは早く凋落ちようらくするのを例としているのに、

谷崎君の芸術は、我々の予想に反して凋落しなかつた。数多の作品を発表しながら読むに堪えないような駄物は、殆んど一つも出していないのは他の作家に例のないことである。だが、平凡な群小作家の間に立って鬼面人を脅かしていた趣きもあつた。華多くして、まことの乏しい憾みがあつた。人工の妙天工を奪つているとも云えるが、谷崎君の初期の作品は、技巧の力で嘘をまことらしく描いたというよりも、嘘を嘘らしく描いていると思われることがあつた。佐藤君の純情的作品とは違つていた。

（小説について、人生の眞実を見たつもりでも、それは、作者の技倆によつてまことらしく描かれた嘘であることが多い。チエホフの書翰集を読むと、スターリンに与えた書翰のうちに、彼れはツルゲネーフを評して、「父と子」は、眞に天才の作品であると云い、しかし、老婆や百姓女などを除いたら、ツルゲネーフの描いた娘や女は凡て不自然で虚偽であると云っている。それは私には意外であつた。リザでもエレーナでも、「煙」のなかのイリーナでも、明治時代のツルゲネーフ崇拜党が、ロシアの眞実の婦人として感激の目をもつて見上げていた婦

人も、チエホフに云わせると、「ロシアの娘」ではなくって、下らないものだとのことである。外ならぬチエホフの批評である。我々他国の読者には反駁する資格がない。これによつても、小説によつて人生の眞実を見てゐるつもりでゐるのも、自己欺瞞に墮する恐れがある。

谷崎君の初期の作品は、小説らしい小説であつた。榮養不良児見たいな瘦形な作品の多かつた中に、くりくりとよく太つた悪たれ小僧見たいな小説であつた。そして、「憂鬱篇」に於て自己の才能を悲観している佐藤君などとは異つて、自己の芸術に強い自信を有つて、倦む

ことなくおのれの道を進んで来たようである。この作者の好んで描いたような人物は、見たところいかにも現実の婦人らしいツルゲネーフ作中の婦人が、不自然であり虚偽であるが如く、不自然であり虚偽であると云われな
いこともない。だが。そういう人物が實際界に存在していてもいなくつても作者の心中には、澆刺として存在していたのだ。ツルゲネーフの描いた婦人は、「ロシアの現実の娘」でなかったかも知れないが、作者はそういう婦人に興味を有ち、自分で描いて自分で楽しんでいたのである。谷崎君も、自分の好みになつた婦人を現実

界に求められなかったので、作中にそれを創造してそれに惑溺していたのかも知れない。春信や歌麿が自分の美人絵に自分で惑溺したであろう如くに——そう考えると、ロシアの自然派の作物も、日本の空想派の作物も、作者の態度は類似したことになって、文学史上の流派別なんかは皮相な見解となるのである。

「蓼喰ふ虫」以後の谷崎君の作品には、初期の作品に附纏っていた臭気が脱け、絢爛だった色彩が渋味を帯び、作家が渾然たる芸術の境地に達し切っているように、私などは敬服した。「まんじ」にしても、「吉野葛」にし

ても、「盲目物語」にしても、材料が異なり着想も異な
っていないながら、それぞれに古典的完成を遂げている。初
期の作品には江戸末期の趣味が連想され、浮世絵と共通
している芸術境が窺われたが、近来の作品には、もつと
古い日本の古典の味わいが伝えられている。日本の伝統
的文学の妙味は充分に吸収されて、それに作家の主観が
活躍しているのだから申分のない訳である。「まんじ」
の如きは、古典趣味とは余程異っているようだが、作者
はこの小説に於て、洗練された大阪言葉に興味を有ち、
そういう日本語の美をあらわそうと努めている。……私

は、今此処で谷崎君の小説に対する讚美の辞を繰返すために筆を進めているのではないので、「日本文学の伝統」ということについて、最近の感想を述べたくなつたのである。谷崎君の初期から最近までの文学経路を見ていると、西洋文明模倣時代の日本に生長しながら、この作者はさほどには欧米文学に感化されず、日本の伝統美を發揮していることが明かだ。佐藤君だって、自分が発行している雑誌を「言霊」と名づけたほどあって、日本の言語文字を尊重しているらしい。島崎藤村氏の「夜明け前」には復古思想が見られるが、藤村氏とか晩年の鷗外氏と

かを、特に取上げるまでもなく、四十を過ぎ五十を過ぎた作家は、青年期に一閃に西洋礼讃をつとめていたにしても、次第に、自分で意識しないうちに、伝統の日本趣味に復帰するものらしい。西洋の作家が年を取ると、カソリックの宗教信者になりたがるのと同様である。先日、ある新聞に、ファツシヨの伊太利では、国語の純化運動が盛んで、「広く使用されている外来語をすべて廃止」せんとする計画があり、料理屋の名前でも床屋の看板でも、日常の生活用語でも古典的な表現法が用いられたしたと報道されていたが、国粹主義が勢力を揮いだしたこ

の頃の日本でも、そういう傾向が起らないものであろうか。カツフェの看板語や、マルクス論者の用語のような蕪雑な外国語が一掃されるのはいいことであるが、しかし、少なくとも文学の上で、伝統的日本趣味は、本当のところ有難いものなのであろうか。谷崎君などは伝統趣味に依ってああいう傑れたる芸術を造り出した。しかし、その態度を真似てばかりいられない作家も多いにちがいない。

小山内薫君などの翻訳心境を、私などは晒わらう訳に行かない。今日の青年作家の幼稚な外国文学模倣をも、一概

に蔑視されないのである。私には、万葉の和歌や芭蕉の
発句だって、それほど有難いものには思われぬ。怪し
い外国語の学力で辛うじて皮相なところをのぞいて真似
をしたって、はじまらない訳だが、過去を顧みても故郷
の風色は落莫としている。野口米次郎氏などは日本の浮
世絵を激賞しているが、浮世絵が日本特有の美感の現わ
れにはちがいないとしても、あんなに極度の推讃に価い
するほどの芸術であろうか。浮世絵の婦人画なんかを見
るたびに、それが痴呆美であるところに、多少の興味を
寄せながらも、一種の侮蔑を感ずるのは、私一人だけな

のであろうか。婦人画ばかりではない、役者絵を見ても、それ等浮世絵師の多くは、そこに、人間に潜んでいゝる威力をも魂をも、我々に示して呉れないのである。西洋人が異国情調に自己陶醉して褒めてくれたために、それにかぶれて、俗人に媚びるのを目的として描かれた低級な芸術を理窟をつけて激賞するのに、私は同感し得られないのである。

　　こういう浮世絵と手を取合つて共存共栄をした旧幕の戯作者文学を振切つて、新しい道に進んだのが、「小説神髓」以来の明治文学者の態度であつて、伝統無視偶像

破壊が、今日までの間に屢々志されて、最近では反宗教反ブルジョア文学唱道のマルクス主義文学も起つたのだが、伝統破壊は、今なお上っ面だけに過ぎないことを、我々もおりおり考えさせられる。国民の他の思想に比べて、文学芸術だけが特殊の道を進む訳には行かないと見えて、いつとなしに国粹の色彩が濃厚になるものと思われる。日本の文学を罵倒して外国の名作を激賞し、それ等に心酔しているらしく云っていた高山樗牛も、本当は日本主義者であった。「偶然に生を享けたる国土の如きは、我故郷とするに足らず」と揚言した内村鑑三氏も、

本当は、武士道的日本の讃美者であり愛国者であつた。芸術や思想に国境なしというコスモポリタンの考えは、人間の本性に適しない浅薄な考えかも知れない。だから、日本の伝統の文学芸術の真価がどうであらうとも、我々はそれに勿体をつけて讃美し、それを守立てて行くのが、正しい道であるかも知れない。そこへ行くと、谷崎君の如く、無駄な懐疑に悩まされないで、伝統的文学趣味を抱擁しながら、自分の芸術を築いて行ける作家は幸福である。

「自分は、歌舞伎の形式の尙将来に利用するに足る事を信ずる」と、坪内逍遙先生は云われて、そして、最初の試みとして、その形式の一つであるチヨボを復活した新作を発表された。ある理論の主張とともに、その理論を具体化した作品を示されるのが、先生の在来の慣例である。

偶像破壊伝統無視の精神によって起された新劇運動も、伝統の怪物たる歌舞伎を劇壇から追放するさきにも、

新劇自身の方が亡んでしまった。イブセンやストリンドベルヒの精神や形式よりも、歌舞伎の形式の方が、将来の日本の演劇に多分に利用すべき分子を有っているかも知れないと、我々も時として考えないこともない。しかし、チヨボの復活「チヨボの新式化」は、我々の予想しないところであった。「阿難の累い」は、役々の台詞にはすべて現代語が用いられ、それにチヨボが挿まれているのが、奇抜に思われ、実演してどういふ効果を奏するかと興味を惹かれるのである。ただ読んだだけでは、何の不調和も感じられず、突飛な感じもしないのは、作者

が老練なためでもあるが、題材が古代から取られ、舞台面が歴史的であり空想的であるためでもある。

この新作は、歌舞伎の形式利用から思いつかれた新しい音楽趣味、新しい形式美を主要な点として試作されたもので、作中の男女の性格とか、思想とかにはそれほど重きを置かれていないのかも知れないが、ただ読んだだけでは、その方がよく我々の心に映じた。「二つの魔障」は、道を修する者の障りとして、西洋でも東洋でも古来の説かれているようであるが、それ等を脱却した所謂法悦の境地は、空漠たる淋しい枯野原のようであると、私な

どには思われる。老病死を現わした仮面に脅かれて心機一転した少女や、釈尊の暗示的な言葉に心の窓を開かれたという青年の心を私はいろいろに忖度そんたくしたが、それは、「旭光輝き、微妙な音楽」の聞える舞台とは調和しそうでないように思われた。

そういう理窟をこの戯曲に求めるのは、外道の考えであらう？ 仮面をかぶって、病苦と老衰との説明をする槃特ふりごとの振事なんかは、一見日本の舞踊に相応しいもののように思われるが、在来の例によると、こういう振りは、道化おかしみた可笑味おかしみに富んだものになり勝ちなので、この新作

を正しく現わすためには、俳優は旧套を脱する必要があるので。可笑味に堕したら、少女の心機一転の動機が弱くなるのである。この少女は、作者が指定されたように、「生れ附きが至って単純」であるとともに極めて情熱が強くなければならぬので、従って、この役に扮し得る女優は、今の劇壇にはありそうに思われない。役柄が昔の岩井某瀬川某を連想させられる。

日本文学電子図書館

谷崎潤一郎と佐藤春夫

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系16 正宗白鳥集
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館